

女性歯科医師と地域医療

8

大学人としての女性性



鶴見大学副学長／歯学部口腔細菌学教授

前田伸子

キーワード

大学人／女性性／口腔細菌学

ままだ のぶこ

●鶴見大学副学長，歯学部口腔細菌学講座教授 ●歯学博士 ●歯科基礎医学会理事，日本歯科薬物療法学会理事 ●1976年鶴見大学歯学部卒業，80年東京医科歯科大学歯学研究科修了(口腔細菌学専攻)，81年鶴見大学歯学部講師，88年米国フロリダ大学歯学部 Post Doctor として留学，89年鶴見大学歯学部講師として米国より帰国，91年鶴見大学歯学部助教授，99年同・教授，09年鶴見大学副学長，現在に至る ●1951年2月生まれ ●主な著書：細菌のことを知って下さい(共著)，ドライマウスの臨床(共著)，口腔微生物学-感染と免疫-第2版(共著)，ほか ●主研究テーマ：真菌の研究

1. 女子大に入学したころ

私の母校である鶴見大学は、総持寺の開祖である瑩山禪師が女子の教育を目指して開校した学校を母体とするため、もともとは女子大で、歯学部も昭和45年に女子のみでスタートした。共学の高校の出身であったせいか、入学したばかりの頃は少々居心地の悪さを感じたものだが、夏休みを迎える頃には、逆に女子のみの気安さにどっぷりと浸かって伸び伸び過ごしていた。やがて、社会の変化に対応すべく附属の中高も含めすべて共学化したので、女子大の名残を多少なりとも今に残すのは、私もお世話になった女子寮だけとなっている。

今年、その女子寮を40年ぶりに訪れる機会があった。かつては学部学科の異なる4人の女子学生が1つの部屋をシェアしていたのが、今はユニットバス

付きの個室になっており、私たちの頃とはまさに雲泥の差であった。しかし、学生時代を思い返すとき、厳しい規則があり、門限は21時、お風呂に入れるのも1日おきで(学生数が多すぎたため2つの寮の学生が交互に入浴するシステムになっていた。当時は驚きであったが今の学生は1日たりとも我慢できないのではないかと)、1人3畳ほどの広さしかなかったあの寮生活が、なぜかひとときわ鮮やかな思い出となって懐かしく蘇るのである。

2. なぜ基礎系を選んだのか？

もともと医学の道に進みたかった父が歯学の道を選ばざるを得なかったため、長女の私は父の代わりに医学部を目指したのだが、親子二代の夢は儚く潰え、私は新設学部であった本学歯学部に入学することになった。時が過ぎ、大学教員として入試面接を担当するようになると、医学部から歯学部に向向転換したことが明らかな受験生に「医学部と歯学部は全く異なる学部だから、同じ医療関係と思うのは大きな勘違いです。その辺のところは良く理解していますか？」と、短い面接時間に納得のいく答えなど得られるはずもないのに、毎回のようにつまらなくなってしまった。目の前にいる受験生を昔の自分に重ね合わせていたのだと思う。

開業歯科医であった父が毎晩遅くまで、休日も返上で補綴物を作製する姿を子供の頃から見ていた私は、歯科医の仕事の内容も量も理解しているつもりでいたけれど、臨床系の実習が増えるにつれ「こん



<Tsurumi Women's Club>鶴見大学歯学部の女性教員が結成した会で今まで3回ほど集まって楽しく食事/飲み会をしている。

なはずではなかったのに」と、歯学部に来たことを悔やむことも少なくなかったのである。基礎系は講義も実習も楽しく、臨床系も講義は全く問題なかったが、実習が不得手であった。実際に患者さんを治療させていただく臨床実習もしかりで、上顎第一大臼歯の初めての抜髄

のとき、1時間以上もかけてやっとの思いで治療を終えた瞬間の患者さんの疲れ果てた表情や、私が作製した部分床義歯を一目見たインストラクターがひたたくるようにしてそれを奪い取り、再作製してくださったことなどは今も忘れられない。

したがって、臨床の道に進まなかったのは、社会への貢献という点からも極めて自然の成り行きであったと思うけれど、基礎系なら何でも良かったわけではなく、いちばん面白いと感じていた口腔細菌学を選び、結果的に今日、教育というかたちで微力ながら社会のお役に立てていることに胸をなでおろしている。

3. 「女にしておくには惜しい」？

父自身も事情が許せば大学で研究をしたかったようで、基礎系の大学院に進みたいという私の希望を全面的に応援してくれた。周囲の開業医たちに「女の子を大学院にやってどうするんだ、嫁にも行かなくなるぞ」と脅されたらしいが、実際、結婚せずに独身でいるのだから、彼らの予想は的中したことになる。

「女なんだから」とか「女のくせに」とか、今なら間違いなくセクシャルハラスメントとして糾弾されるような言葉も、30年前はごく普通に口にされており、私自身も学生時代、ある男性教授から「女にしておくには惜しい」と言われたことがある。彼にしてみれば最大限の褒め言葉のつもりであったかもしれないが、結論から言うと、私は女で良かったと心から思っている。

私が進んだ国立大学の歯学研究科は、鶴見とは正反対で極端に女性が少なかったため、これまた最初は居心地が悪く、どうなることかと心配したが、しばらくすると慣れてきて、それ以降はどんな環境に投げ込まれても「せいぜい3ヶ月の辛抱だ」と開き直れるようになった。新しい環境の男性たちが私に対してどんな感想を持っていたのか、「女のくせに」か「女にしては」か定かではないけれど、希少価値とでもいうのか、「女だから」大事にしてもらえた部分も少なからずあったように思えるのである。



<卒業生と>卒業式後の謝恩会で角田（結婚後、住野）衣理加さん、大島朋子准教授と；真ん中が卒業後、私の講座の大学院生になり、学位取得後も研究を継続している角田衣理加さん、右が私と同じく本学歯学部卒業後に東京医科歯科大学歯学研究科に行き、現在、口腔細菌学講座の大島朋子准教授。3人でエッセンシャルオイルを歯科に応用する研究をしている。

4. 女性の教授が少ないのはなぜ？

他大学の関係者（特に男性）から「女子には優秀な学生が多いけれど、男子学生は…」というお話をよく伺うし、本学も年ごとに若干異なるものの、真面目な学生は女子のほうにやや多いように感じる。その割に、大学人として働く女性、特に教授が極端に少ないのはなぜだろう。また、我が国の共学の大学に女性の学部長、学長が何人おられるのか分からないが、少なくとも歯科大／歯学部では女性の学部長、学長あるいは理事長は1人もおられない。諸外国ではごく当たり前のように女性の学部長や学長が存在することや、世界的な水準において日本女性の能力が特段劣るわけではないことを考え合わせると、日本の大学は女性の能力に見合った地位を与えていないと思わざるを得ない。

本学は女子大で出発したためか、ありがたいことに女性教員が多く（歯学部で女性教授2名、准教授4名。全体の教授／准教授数から見るとまだ少ないが…）、私自身も1回生であったおかげで能力以上の職位に恵まれている。女性に教育の場を与えたいという瑩山禅師の深い配慮が、何百年も経った今、本学に実っていると言えるだろう。

私は独身で気楽に好きなことをしてきただけだが、女性が結婚し子供を育てながらキャリアを積んでいくのは、今の日本でもまだ簡単なことではない。それでも、大学人として、開業歯科医として、キャリアを着実に積み重ねて来られた女性が私の周りにたくさんおられる。しかも、髪を振り乱してがむしゃらに働き詰めているのでなく、仕事も生活も楽しみながら…。そういう女性たちが私にとってのお手本であり、女性に生まれて良かったと改めて思う所以でもある。

能力のある人が男女の区別なく評価され、それに見合った地位を与えられ活躍できることを願うと同時に、女性の大学人であるからこそできることは何か、自分に課せられた使命は何か、ということをつねに考えながら、私なりの社会貢献の在り方をこれからも模索し続けたいと思っている。